

多神教

泉鏡花

青空文庫

場所
名

美濃、三河の国境。山中の社——奥の院。

白寮権現、媛神。(はたち余に見ゆ) 神職。(榛貞臣。修

験の出) 禰宜。(布気田五郎次) 老いたる禰宜。雑役の仕丁。(柵

村久内) 二十五座の太鼓の男。太鼓の男。笛の男。おかめの面

の男。道化の面の男。般若の面の男。後見一人。お沢。(或男の妾、

二十五、六) 天狗。(丁々坊) 巫女。(五十ばかり) 道成寺の白拍

子に扮したる俳優。一ツ目小僧の童男童女。村の児五、六人。

禰宜 (略装にて) いや、これこれ (中 啓を挙げて、二十五座の一連に呼掛く) 大
 分日もかげつて参つた。いづれも一休みさつしやるが可いぞ。

この言葉のうち、神樂の面々、踊の手を休め、従つて囃子静まる。一連皆素朴な
 る山家人、装束をつけず、面のみなり。——落葉散りしき、尾花むら生い
 たる中に、道化の面、おかめ、般若など、居ならび、立添い、意味なき身ぶり
 をしたるを留む。おのおのその面をはずす、年は三十より四十ばかり。後見最
 も年配なり。

後見 こりや、へい、……神ぬし様。

道化の面の男 お喧しいこんでござりますよ。

メ太鼓の男 稽古中のお神樂で、へい、囃子ばかりでも、大抵村方は浮かれ上つてお
 りますだに、面や装束をつけましては、媪、媽々までも、仕事稼ぎは、へい、手につき
 ましねえ。

笛の男 明後日げいから、お社の御祭礼で、羽目さはずいて遊びますだで、刈入時の日

は短え、それでは氣の毒と存じまして、はあ、これへ出合いましたでござえますがな。
 般若の面の男 見よう見真似の、から猿踊りで、はい、一向にこれ、馴れませぬものだ
 でな、ちよつくらばかり面をつけて見ます了見の処……根からお麓未な御馳走を、
 とろろもも打ちまけました。ついお囃子に浮かれ出いて、お社の神様、さぞお見苦し
 い事でがんしよとな、はい、はい。

禰宜 ああ、いやいや、さような斟酌には決して及ばぬ。料理方が摺鉢俎板を引
 くりかえしたとは違うでの、催ものの楽屋はまた一興じやよ。時に日もかげつて参つた
 し、大分寒うもなつて来た。——おお沢山な赤蜻蛉じや、このちらちらむらむらと飛
 散る処へ薄日の射すのが、……あれから見ると、近間ではあるが、もみじに雨の降るよ
 うに、こう薄りと光つてな、夕日に時雨が来た風情じや。朝夕存じながら、さても、
 しんしんと森は深い。(樹立を仰いで) いずれも濡れよう、すぐにまた晴の役者衆
 じや。些と休まつしやれ。御酒のお流れを一つ進じよう。神職のこどづけじや、一所
 に、あれへ参られい。

後見 なあよ。

太鼓の男 おおよ。(言交す。)

道化の面の男 かえつておぞうさとは思うけんどが。

笛の男 されば。

おかめの面の男 御挨拶ごあいさつべい、かたがただで。(いずれも面を、楽しげに、あるいは背、

あるいは胸にかけたるまま。)

後見 はい、お供して参りますで。

禰宜 さあさあ、これ。——いや、小児衆こどもしゆ——(渠かれら幼きが女の児こ二人、男の子三人に

て、はじめより神楽を見て立つ)——一遊び遊んだら、暮れぬ間まに帰らつしやい。

後見 これ、立巖たちいわにも、一本橋いっぽんばしにも、えつと気をつきようぞよ。

小児一 ああ。

かくて社家しゃけの方かた、樹立こたちに入る。もみじに松まじを交う。社家は見えす。

小児二 や、だいぶ散らかした。

小児三 そうだなあ。

小児一 よこれやしないやい、木の葉きだい。

小児二 木の葉でも散らばった、でよう。

小児一 もみじでも、やっぱり掃くのか？

女児二 莫塵もくじんの上に散ちつていれば、内うちでもお掃除そうじするわ。

女児一 神様かみさまのいらつしやる処ところよ、きれいにして行きましよう。

女児二 お縁ゆかりは綺麗きれいよ。

小児一 じゃあ、階だんだん段だんから。おい、箒ほうきの足りないものは手で引搔ひつかけ。

女児一 私わたしは袂たもとにするの。

小児二 乱暴らんぼうだなあ、女のくせに。

女児三 だって、真紅まっかなのだの、黄色いちようい銀杏ぎんぎようだの、故わざとだつて懐ふところへさ、入いれる事ことよ。

折くれたる熊手くまで、新あたらしきまた古ふる箒ほうきを手てん手に引ひ出し、落おち葉ばを搔かき寄よせ搔かき集あめ、

かつ掃うたきつつ口くち々うたに唄うたう。

「お正月どは何どこ処ところまで、

からから山やまの下したまで、

土産みやげは何なんじや。

榧かやや、勝かち栗くり、蜜柑みかん、柑子こうじ、橘たちばな。……

お沢さわ (向むつて左ひだりの方かた、真暗まっくらに茂さかれる深ふかき古杉こだちの樹立こだちの中なかより、青味あおあじの勝かちちたる縞しまの小こ袖そで、浅葱あさぎの半襟はんえり、黒くろ縷ろ子すの丸帯まるおび、髪かみは丸髻まるまげ。鬢びんやや乱みだれ、うつくしき俵おもかげやつに窠あなれ

の色見ゆ。素足草履穿にて、その淡き姿を顕わし、静に出でて、就中杉の巨木の幹に凭りつつ——間——小児らの中に出づ。まあ、いいお児ね、媛神様のお庭の掃除をして、どんなにお喜びだか知れませんか——姉さん……（寂く微笑む）あの、小母さんがね、ほんの心ばかりの御褒美をあげましょう。一度お供物にしたのですよ。さあ、お菓子。

小児ら、居分れて、しげしげ瞻る。

お沢 さあ、めしあがれ。

小児一 持つて行くの。

女児一 頂いて帰るの。（皆いたいけに押し頂く。）

お沢 まあ。何故ね。

女児二 でも神様が下さるんですもの。

お沢 ああ、勿体ない。私はお三ごんだよ、箒を一つ貸して頂戴。

小児二 じゃあ、おつかい姫だ。

女児一 きれいな姉さん。

女児二 こわいよう。

小児一 そんな事いうと、学校で笑われるぜ。

女児一 だって、きれいな小母さん。

女児二 こわいよう。

小児二 少しこわいなあ。

いい次ぎつつ、お沢の落葉を搔寄する間に、少しずつやや退る。

小児一 お正月かも知れないぜ。この山まで来たんだ。

小児二 や、お正月は女か。

小児三 知らない。

小児一 狐だと大変だなあ。

小児二 そうすりやこのお菓子なんか、家へ帰ると、榧や勝栗だ。

小児三 そんなら可いけれど、皆木の葉だ。

女の児たち きやあ——

男の児たち やあ、転ぶない。弱虫やい。——（かくて森蔭にかくれ去る。）

お沢（箒を堂の縁下に差置き、御手洗にて水を掬い、鬢搔撫で、清き半巾を袂にし、

階段の下に、少時ぬかずき拝む。静寂。きりきりきり、はたり。何処ともなく機織の

音聞こゆ。きりきりきり、はたり。——お沢。面を上げ、四辺を。し耳を澄ましつつ、やがて階段に斜に腰打掛く。なお耳を傾け傾け、きりきりきり、はたり。間調子に合わせて、その段の欄干を、軽く手を打ちて、機織の真似し、次第に聞惚れ、うつとりとなり、おくれ毛はらはらとうなだれつつ仮睡る。)

仕丁 (揚幕の裡にて——突拍子なる猿の声) きやツきやツきやツ。 (乃ち面長き

ふるざる老猿の面を被り、水干烏帽子、事触に似たる態にて——大根、牛蒡、太人參、おおかぶら、ぼうだちからぎげすたか、片荷に酒樽を積みたる蘆毛の駒の、紫なる古手綱を

曳いて出づ) きやツ、きやツ、きやツ、おきやツ、きやア——まさるめでとうのう仕る、

踊るが手もと立廻り、肩に小腰をゆすり合わせ、と、ああふらりふらりとする。きやツ

きやツきやツきやツ。あはははは。お馬丁は小腰をゆするが、蘆毛よ。(振向く) お

厩が近うなつて、和どのの足はいよいよ健かに軽いなあ。この裏坂を帰らいでも、正

面の石段、一飛びに翼の生じた勢じや。ほう、馬に翼が生えて見い。われらに尻尾がぶ

ら下る……きやツきやツきやツ。いや化の皮の顛われぬうちに、いま一献きこしめそ

う。待て、待て。(馬柄杓を抜取る) この世の中に、馬柄杓などを何で持つ。それ、

それこのためじや。(酒を酌む) ととととと。(かつ面を脱ぐ) おつとあるわい。きや

ツきやツきやツ。仕丁めが酒を私するとあつては、御前様、御機嫌むずかしからう。猿が業と御覽ずれば仔細ない。途すがらも、度々の頂戴ゆえに、猿の面も被つたまま、脱いでは飲み被つては飲み、質の出入れの忙しい酒じやな。あはははは。おとお、竜の口の清水より、馬の背の酒は格別じや、甘露甘露。(舌鼓うつ) たつたつたつ、甘露甘露。きやツきやツきやツ。はて、もう御前に近い。も一度馬柄杓でもあるまいし、猿にも及ぶまい。(とろりと酔える目に、あなたに、階なるお沢の姿を見る。慌しくまうつむけに平伏す) ははッ、大権現様、御免なされ下さりませ、御免なされ下さりませ。靈驗な御姿に対し、恐多い。今やなぞ申しましたる儀は、全く譎言にござります。猿の面を被りましたも、唯おみきを私しよう、不届ばかりではござりませぬ、貴女様御祭礼の前日夕、お厩の蘆毛を猿が曳いて、里方を一巡いたしましたると、それがそのままに風雨順調、五穀成就、百難皆除の御神符となります段を、氏子中申伝え、これが吉例にござりまして、従つて、海つもの山つものもの献上を、は、はッ、御覽の如く清らかに仕りまする儀でござりまして、偏にこれ、貴女様御威徳にござります。お庇を蒙りまする嬉しさの余り、ついたべ酔いまして、申訳もござりませぬ。真平御免なされ下さりませ。ははッ、(恐る恐る地につけたる額

を擡ぐ。お沢。うとうととしたるまま、しなやかに膝をかえ身動きす。長襦袢の浅葱の褌、しつとりと幽に媚めく。それへ、唯今それへ参ります。恐れ恐れ。ああ、恐れ。それ以て、烏帽子きた人の屑とも思召さず、面の赤い畜生とお見許し願わしう、はッ、恐れ、恐れ。（再び猿の面を被りつつも進み得ず、馬の腹に添い身を屈め、神前を差覗く）蘆毛よ、先へ立てよ。貴女様み気色に触る時は、矢の如く鬢櫛をお投げ遊ばし、片目をお潰し遊ばすが神罰と承る。恐れ恐れ。（手綱を放たれたる蘆毛は、頓着なく衝と進む。仕丁は、ひよこひよここと従い続く。舞台やがて正面にて、蘆毛は一氣に厩の方、右手もみじの中にかくる。この一氣に、尾の煽をくらえる如く、仕丁、ハタと躓き四つに這い、面を落す。慌てて懷に捻込む時、間近にお沢を見て、ハツと身を退りながら凝と再び見直す）何じや、人か、参詣のものか。はて、可惜二つない肝を潰した。ほう、町方の。……艶々と媚めいた婦じやが、ええ、驚かしおった、おのれ！しかも、のうのうと居睡りくさつて、何処に、馬の通るを知らぬ婦があるものか、野放図な奴めが。——いやいや、御堂、御社に、参籠、通夜のもの、うたたねするは、神の御つげのある折じやと申す。神慮のほども畏い。……眠を驚かしてはなるまいぞ。（拔足に社前を横ぎる時、お沢。うつつに膝を直さんとする懷中より、

一挺の鉄槌ハタと落つ。カタンと鳴る。仕丁。この聊の音にも驚きたる状して、足を爪立てつつ熟と見て、わなわなと身ぶるいするとともに、足疾に樹立に飛入る。間。

——懷紙の端乱れて、お沢の白き胸さきより五寸釘バラリと落つ。)

白寮権現の神職を真先に、禰宜。村人一同。仕丁続いて出づ——神職、

年四十ばかり、色白く肥えて、鼻下に髻あり。落ちたる鉄槌を奪うと斉しく、お沢の肩を掴む。

神職 これ、婦。

お沢 (声の下に驚き覚め、身を免れんとして、階前には衆の林立せるに遁場を失い、神職の手を振りもぎりながら) 御免なさいまし、御免なさいまし。(一度階をのぼりに、

廻廊の左へ遁ぐ。人々は縁下より、ばらばらとその行く方を取巻く。お沢。遁げつつ

引返すを、神職、追状に引違え、帯際をむずと取る。ずるずる黒縹子の解くる

を取つて棄て、引据え、お沢の両手をもて犇と蔽う乱れたる胸に、岸破と手を差入る)

あれ、あれえ。

神職 (発き出したる形代の藁人形に、すくすくと釘の刺りたるを片手に高く、片手に

鉄槌を翳すと斉しく、威丈高に突立上り、お沢の弱腰を と蹴る) 汚らわしいぞ

！ 罰当り。

お沢 あ。(階を転び落つ。)

神職 鬼畜、人外、沙汰の限りの所業をいたす。

禰宜 いや何とも……この頃の三晩四晩、夜ふけ小ふけに、この方角……あの森の奥に当つて、化鳥の叫ぶような声がしますで、話に聞く、咒詛の釘かとも思いました。なれど、場所柄ゆえの僻耳で、今の時節に丑の刻参などは現にもない事と、聞き流しておつたじやが、何と先ず……この雌鬼を、夜叉を、眼前に見る事わい。それぞれ俯向いた頬骨がガツキと尖つて、頤は嘴のように三角形に、口は耳まで真赤に裂けて、色も縹になつて来た。

般若の面の男 (希有なる顔して) 禰宜様や、私らが事をおつしやるずらか。

禰宜 気もない事、この女夜叉の悪相じや。

般若の面の男 ほう。

道化の面の男 (うそうそと前に出づ) 何と、あの、打込む太鼓……

×太鼓の男 何じやい。何じやい。

道化の面 いや、太鼓ではない。打込む、それよ、カーンカーンと五寸釘……あの可恐

い、藁の人形に五寸釘ちゆうは、はあ、その事でござりますかね。(下より神職の手にのびあが伸上る。)

笛の男 (おなじく伸上る) 手首、足首、腹の真中(我が臍を圧えて反る) ひやあ、みし

みしと釘の頭も見えぬまで打込んだ。ええ、血など、ぼたれてはいぬずらか。

神職 (彼が言のままに、手、足、胴腹を打返して藁人形を翳し見る) 血も滴りよう。：

藁も肉のように裂けてある。これ、寄るまい。(この時人々の立かかるを搔払う) 六

根 清 淨、澄むらく、清らかに、神に仕うる身なればこそ、この邪を

にも取るわ。御身たちが悪く近づくと、見たばかりでも筋骨を悩み煩らうぞよ。(今

度は悠然として階を下る。人々は左右に開く) 荒び、すさみ、濁り汚れ、ねじけ、曲

れる、妬 婦め、われは、先ず何処のものじや。

お沢 (もの言わず。)

神職 人の娘か。

お沢 (わずかに頭ふる。)

神職 人妻か。

禰宜 人妻にしては、艶々と所帯氣が一向に見えぬな。また所帯せぬほどの身柄と

も見えぬ。妾、てかけ、囿ものか、これ、靈驗な神の御前じや、明かに申せ。

お沢 はい、何も申しませぬ、ただ（きれぎれにいう）お恥しう存じます。

神職 おのれが恥を知る奴か。——本妻正室と言わばまた聞こえる。人のもてあそびの腐れ爛れ汚れものが、かけまくも畏き……清く、美しき御神に、嫉妬の願を掛けるとは何事じや。

禰宜 これ、速におわびを申し、裸身に塩をつけて揉んでなりとも、払い浄めておもらい申せ。

神職 いや布気田、（禰宜の名）払い清むるより前に、第一は神の御罰、神罰じや。御

神の御心は、仕え奉る神ぬしがよく存じておる。——既に、草刈り、柴刈りの女な

ら知らぬこと、髪、化粧し、色香、容つুক্তった町の女が、御堂、拜殿とも言わず、この階に端近く、小春の日南でもある事か。土も、風も、山気、夜とともに身に沁むと申すに。——

神楽の人々。「酔も覚めて来た」「おお寒」など、皆襟、袖を掻合わす。

神職 ……居眠りいたいて、ものもあるうず、棺の蓋を打つよりも可忌い、鉄槌を落し、釘を溢す——釘は？……

禰宜 (たなごころ 掌を見す) これに。

神楽の人々、そと集い覗く。

神職 即ち神の御心じや——その御心を畏み、次第を以て、順に運ばねば相成らん。唯

今布気田も申す——三晩、四晩、続けて、森の中に鉄槌の音を聞いたというが、毎夜、

これへ参つたのか、これ、明に申せよ。どうじや。

お沢 はい、(言い淀み、言い淀み)今……夜……が、満……願……でございました。

神職 (御堂を敬う) ああ、神慮は貴い。非願非礼はうけ給わずとも、俗にも満願と申す、

その夕に露顕した。明かに邪悪を退け給うたのじや。——先刻も見れば、その森から出

て参つて、小児たちに何か菓子やうのものを与えたが、何か、いつも日の中から森の奥

に潜みおつて、夜ふけを待つて呪詛うたかな。

お沢 はい……あの……もうおかくしは申しません。お山の下の恐しい、あの谿河を渡

りました。村方に、知るべのものがありません、其処から通いましたのでございます。

神楽の人々囁き合う。

禰宜 知っておるかな。

——「なあ。」「よ。」「うむ。」「あれだ。」口々に——

後見 何が、お霜しも婆ばあさんの、ほれ、駄菓子屋の奥に、ちらちらする、白いものがあつてえ。町での御恩人ぞい。恥やまいしい病やまいさあつて隠れてござるで、ほつても垣かきのぞきなどせまいぞ、と婆さんが言うだでな。

笛の男 癩かつたいずらか。

太鼓の男 恥はらしい病はらちゆうで。

おかめの面の男 ほんでも、孕はらんだ娘だべか。

禰宜 女子おなごが正しい懐妊は恥はらではないのじや。それでは、毎晩、真夜中に、あの馬も通らぬ一本橋を渡つたじやなあ。

道化の面の男 女の一念だ一本橋を渡らいでかよ。ここら奥の谿河たにがわだけれど、ずっと川かわ下で、東海道の大井川おおいがわより大でかいという、長柄川ながらの鉄橋な、お前様。川むかいの駅へ行つた県庁けんちやうづとめの旦那だんなどのが、終汽車しまいぎしやに帰らぬわ。予かねてうわさの、宿場しゆくばの娼ふ婦ぼと寝たんべい。唯ただおくものかと、その奥様ちゆうがや、梅雨つゆぶりの暗やみの夜中よなかに、満水みづの泥浪どろなみを打つ橋はしげたさ、すれすれの鉄橋を伝つてよ、いや、四つ這いでよ。何が、いま産れるちゆう臨月りんげつ腹はらで、なあ、流ながれに浸りそうに捌さばき髪がみで這うて渡つた。その大おほきな腹はらずらえ、——夜よがえりのものが見た目めでは、大でかい鮫鱈あんこうほどな燐火ふとだまが、ふわりふわ

りと鉄橋の上を渡つたいうだね、胸の火が、はい、腹へ入つて燃えたんべいな。

仕丁 お言ことばの中なかでありますがな、橋あぶなが危あぶなくば、下の谿河いかわは、巖いわを伝つたうて渡わたられますでな、

お厩うまやの馬うまはいつも流ながを越こします。いや、先刻さきとぎなどは、落葉らくえつが重おもなり重おもなり、水一杯みづいっぱいに渦

巻まいて、飛とび々とびの巖いわが隠かくれまして、何処どこを渡わたろうかと見みますうちに、水みづも、もみじで、

一面いちめんに真紅まっかになりました。おつと……酔よつた目めの所為せいではござりませぬよ。

禰宜ねい 棚村たなむら。(仕丁しぢやうの名な) 御身おみは何なんの話わをするや。

仕丁 はあ、いえ、孕はらみ婦おんなが鉄橋てつきやうを這越はいこすから見みますれば、丑うしの刻とき参まゐり

橋はしは、気けもなく渡わたると申まをすことで。石段いしだんは目めにつきまます。裏うらづたいの山道やまみちを森かよへ通とつ

たに相違さうゐはござりますまい。

神職かみ 棚村たなむら、御身おみまず、その婦おんなの帯おビを棄すてい。

禰宜ねい かような婦おんなの、汚よごらわしい帯おビを、抱かかいているという事ことがあるものか。

仕丁 私わしが、確しかと圧おさえておりますればこそで、うかつに棄すてますと、このまま黒蛇くろへびに成な

つて腕うでり廻まわりましょう。

禰宜ねい 榛はしばみ(神職かみ名な) 様さまがおつしやる。樹きの枝えだへなりと掛かけぬかい。

仕丁 樹きに掛かけましたら、なお、ずるずると大蛇だいじやに成なつて下おります。(一層いちじやう胸むねに抱かかく。)

神職 棚村、見苦しい、森の中へ放し込め。

仕丁、その言の如くにす。――

お沢 あの……（ふるえながら差出す手を、払いのけて、仕丁。森に行く。帯を投げるとともに飛返る。）

神職 何とした。

仕丁 ずるずると巻きましたが、真黒な一幅になって、のろのろと森の奥へ入りました。……大方、釘を打込みます古杉の根へ、一念で、巻きついた事でござりましよう。

神職 いずれ、森の中において、忌わしく、汚らわしき事をいたしおるは必定じゃ。さて、婦。……今日は昼から籠ったか。真直に言え、御前じゃぞ。

お沢 はい、（間）はい、あの、一七日の満願まで……この願を掛けますものは、唯一目、……一度でも、人の目に掛りますと、もうそれなりに、願が叶わぬと申します。昨夜までは、獣の影にも逢いません。もう一夜、今夜だけ、また不思議に満願の夜といますと、人に見られると聞きました。見られたら、どうしましょう。口惜い……その人の、咽喉、胸へ喰いつきましても……

神職 これだ——したたかな婦めが。

お沢 ええ、あのそれが何になりましよう。昼から森にかくれました方が、何がどうでも、第一、人の目にかかりますまいと、ふと思いついたのです。木の葉を被り、草に突伏しても、すくまりましても、雉、山鳥より、心のひけめで、見つけれそうに思われて、気が気ではありません。かえって、ただの参詣人のようにしております方が、何の触りもありませんまいと、存じたのでございます。

神職 秘しがくしに秘め置くべき、この呪詛の形代を（藁人形を示す）言わば軽々しう身につけおつたは——別に、恐多い神木に打込んだのが、森の中にまだ他にもあるからじゃろ。

お沢 いいえ、いいえ……昨夜までは、打ったままで置きました。私がちよつとでも立離れます間に——今日はまたどうした事でございますか、胸騒ぎがしますまで。……禰宜 いや、胸騒ぎが凄じい、男を呪詛うて、責殺そうとする奴が。

お沢 あの、人に見つかりますか、鳥獣にも攫われます。故障が出来そうでなりません。それで……身につけて出ましたのです。そして……そして……お神ぬし様、皆様、誰方様も——憎い口惜しい男の五体に、五寸釘を打ちますなどと、鬼でなし、蛇でなし、

そんな可おそろし恐い事は、思つて見もいたしません。可愛かわいい、大事な、唯一人の男の児こわづらが煩わづらつておりますものですから、その病を——疫やくびよう病びょうがみを——

「ええ。」「疫病神。」村人らまた退しきる。

神職 疫病神を——

お沢 はい、封じます、その願掛がんがけなんでございませぬもの。

神職 町にも、村にも、この八里四方、目下瘡瘡もつかほうそうも、はしかもない、何やまいの疾やまいだ。

お沢 はい……

禰宜 何病じや。

お沢 はい、風邪かぜを酷ひどくこじらしました。

神職 (嘲あざわら笑う) はてな、風に釘を打てば何なんになる、はてな。

禰宜 はてな、はてな。

村人らも引入れられ、小首を傾くる状さま、しかつめらし。

仕丁 はあ、皆様、奴やつこだこ 風ひつかかが引掛ひつかかるでござりませうで。

——揃そろつて嘲あざけり笑う。——

神職 出来た。——掛かかると言え、身みたちも、事件に引掛ひつかかりじや。人の一命にかかわる事、

始末をせねば済まされない。……よくよく深く企んだと見えて——見い、その婦、胸も、膝も、ひらしやらと……（お沢、いやが上にも身を細め、姿の乱れを引つくり引つくり、肩、袖、あわれに寂しく見ゆ）余りと言えば雪よりも白い胸、白い肌、白い膝と
 思うたれば、色もなるほど白々としたが、衣服の下に、一重か、小袖か、真白い衣を
 絡まといている。魔の女め、姿まで調えた。あれに（ひじ 脇長く森を指す）形代かたしろを礫はりつけにして、釘
 を打った杉のあたりに、如何いかような可け汚がらわしい可い忌いましい仕掛しかけがあるかも知れぬ。いや、
 御身おみたち、（村人と禰宜ねぎにいう）この婦おんなを案内ひつたに引立てて、臨場裁断と申すのじや。怪
 しい品しなじな々なかっぱじつて来こられい。証拠しんこの上に、根から詮議せんぎをせねばならぬ。さ、婦、
 立てい。

禰宜 立とう。

神職 許す許さんはその上じや。身は——思う旨むねがある。一度社宅から出直す。棚村たなむらは、
 身とも参れ。——村の人も婦を連れて、引立てて——

村人ら、かつためらい、かつ、そそり立ち、あるいは捜し、手近かきときを搔取かきとつて、
 鍬くわ、鋤すきの類たぐい、熊手、古箏など思い思いに得ものを携う。

後見 先へ立て、先へ立とう。

禰宜 箒で、そのやきもちの頬を敲くぞ、立ちませい。

お沢 (急に立つて、颯と森に行く。一同面を見合すとともに追つて入る。神職と仕丁は反対に社宅―舞台上には見えず、あるいは遠く萱の屋根のみ―に入る。舞台空し。落葉もせず、常夜燈の光幽に、梟。二度ばかり鳴く。)

神職 (威儀いかめしく太刀を佩き、盛装して出づ。仕丁相従い床几を提げ出づ。神職厳に床几に掛る。傍に仕丁踞居て、棹尖に劍の輝ける一流の旗を捧ぐ。――別に老いたる仕丁。一人。一連の御幣と、幣ゆいたる櫛を捧げて従う。)

お沢 (悄然として伊達巻のまま袖を合せ、裾をずらし、打うなだれつつ、村人らに囲まれ出づ。引添える禰宜の手に、獸の毛皮にて、男枕の如くしたる包一つ、怪き紐にてかがりたるを不気味らしく提げ来り、神職の足近く、どきと差置く。)

神職 神のおおせじや、婦、下におれ。――誰ぞ御灯をかかげい――(村人一人、燈を開く。灯にすかして)それは何だ。穿出したものか、ちびりと濡れておる。や、(足を爪立つ)蛇が絡んだな。

禰宜 身どもなればこそ、近う寄つても見ましたれ。これは大木の杉の根に、草にかくしてござりましたが、おのずから樹の雫のしたたります茂ゆえ、びしやびしやと濡れて

おります。村の衆は一目見ますと、声も立てずに遁ぎようとなりました。あの、円肌で、いびつづくつた、尾も頭も短う太い、むくりむくり、ぶくぶくと横にのたくりまして、毒気は人を殺すと申す、可恐く、気味の悪い、野槌という蛇そのままの形に見えました。なれども、結んだのは生蛇ではござりませぬ。この悪念でも、さすがは婦で、包を結えましたは、継合わせた蛇の脱殻でござりますわ。

神職 野槌か、ああ、聞いても忌わしい。……人目に触れても近寄せまい巧じやろ、企んだな。解け、解け。

禰宜 (解きつつ) 山犬か、野狐か、いや、この包みました皮は、貉らしうござります。

一同目を注ぐ。お沢はうなだれ伏す。

神職 鏡——うむ、鉄輪——うむ、蠟燭——化粧道具、紅、白粉。おお、お鉄漿、可厭なにおいじや。……別に鉄槌、うむ、赤鏽、黒鏽、青鏽の釘、ぞろぞろと……青い蜘蛛、紅い守宮、黒蜥蜴の血を塗つたも知れぬ。うむ、(きらりと佩刀を抜きそばむると斉しく、藁人形をその獣の皮に投ぐ) やあ、もはや陳じまいな、婦——で、で、で先ず、男は何ものだ。

お沢 (息の下にて言う) 俳優です。

——「俳優、」「ほう俳優。」「俳優。」と口々に言い継ぐ。

神職 何じや、俳優？……——町へ参つてでもおるか。国のものか。

お沢 いいえ、大阪に——

禰宜 やけに大胆に吐すわい。

神職 おのれは、その俳優の妾か。

お沢 いいえ。

神職 聞けば、聞けば聞くほど、おのれは、ここだくの邪淫を侵す。言うまでもない、

人の妾となつて汚れた身を、鍍塗上塗に汚しおる。あまつさえ、身のほどを弁えず

して、百四、五十里、二百里近く離れたままで人を咒詛う。

仕丁 その、その俳優は、今大阪で、名は何と言うかな。姉様。

神職 退れ、棚村。恚る場合に、身らが、その名を聞き知つても、禍は幾分か、その呪詛

われた当人に及ぶと言う。聞くな。聞けば聞くほど、何が聞くほどの事もない。——淫

奔、汚濁、しばらくの間も神の御前に汚らわしい。茨の鞭を、しやつしろあぶらの白脂しりの臀

に当てて石段から追落そう。——が呆れ果てて聞くぞ、婦——その釘を刺した形

代を、肌おのに当てて居睡いねむつた時の心持は、何とあつた。

お沢 むずむず痒うございました。

禰宜 何じや藁人形をつけて……肌が痒い。つけつけと吐す事よ。これは気が変になったと見える。

お沢 いいえ、夢は地獄の針の山。——目の前に、茨に霜の降りましたような見上げる崖がありまして、上れ上れと恐しい二つの鬼に責められます。浅ましい、恥しい、裸身に、あの針のざらざら刺さるよりは、鉄棒で挫かれないと、覚悟をしておりますが、馬が、一頭、背後から、青い火を上げ、黒煙を立てて駈けて来て、背中へ打つかりそうになりましたので、思わず、崖へころがりますと、形代の釘でございましょう、針の山の土が、ずぶずぶと、この乳へ……脇の下へも刺りましたが、ええ、痛いのなら、うずくのなら、骨が裂けても堪えます。唯くわつと身うちがほてって、その痒いこと、むず痒さに、懐中へ手を入れて、うっかり払いましたのが、つい、こぼれて、ああ、皆さんのお目に留ったのでございます。

神職 はて、しぶとい。地獄の針の山を、痒がる土根性じや。茨の鞭では堪えまい。よい事を申したな、別に御罰の当てようがある。何よりも先ず、その、世に浅ましい、鬼畜のありさまを見しよう。見よう。——御身たちもよく覚えて、お社に近い村里の、

嫁、嬢々、娘の見せしめにもし、かつは郡へも町へも触れい。布気田。

禰宜は。

神職 じたばたするなりや、手取り足取り……村の衆にも手伝わせて、その婦の上衣を引剥げ。髪を捌かせ、鉄輪を頭に、九つか、七つか、蠟燭を燃して、めらめらと、蛇の舌の如く頂かせろ。

仕丁 こりや可い、可い。最上等の御分別。

神職 退れ、棚村。さ、神の御心じや、猶予うなよ。

——渠ら、お沢をpush取込めて、そのなせる事、神職の言の如し。両手を扼り、腰をpushして、真正面に、看客にその姿を露呈す。——

お沢 ヒイ……（歯を切りて忍泣く。）

神職 いや、蒼ざめ果てた、がまだ人間の婦の面じや。あからさまに、邪慳、陰悪の相を頭わす、それ、その般若、鬼女の面を被せる。おお、その通り。鏡も胸に、な、それそれ、藁人形、片手に鉄槌。——うむその通り。一度、二度、三度、ぐるぐると引廻したらば、可。——何と、丑の刻の咒詛の女魔は、一本歯の高下駄を穿くと言うに、些同もの足りぬ。床几に立たせろ、引上げい。

渠は床几を立つ。人々お沢を抱すくめて床几に載す。黒髪高く乱れつつ、一本の杉の梢に火を捌き、艶媚にして婀娜なる一個の鬼女、すつくと立つ——

お沢 ええ！ 口惜しい。（殆ど痙攣的に丁と鉄槌を上げて、面斜めに牙白く、思わず

神職を凝視す。）

神職 （魔を切るが如く、太刀を振り回かしつつ後退る）したたかな邪気じや、古今

の悪気じや、激い汚濁じや、禍じや。（忽ち心づきて太刀を納め、大なる幣を押し取つて、

飛蒐る）御神、祓いたまえ、浄めさせたまえ。（黒髪その呪詛の火を払い消さん

とするや、かえつて青き火、幣に移りて、めらめらと燃上り、心火と業火と、もの凄く

立累る）やあ、消せ、消せ、悪火を消せ、悪火を消せ。ええ、埒あかぬ。床ぐるみ

に蹴落さぬかいやい。（狼狽て叫ぶ。人々床几とともに、お沢を押し落とし、取包んで

蠟燭の火を一度に消す。）

お沢 （崩折れて、倒れ伏す。）

神職 （吻と息して）——千慮の一失。ああ、致しようを過つた。かえつて淫邪の鬼の形

相を火で明かに映し出した。これでは御罰のしるしにも、いましめにもならぬ。陰

惨忍刻の趣は、元来、この婦につきものの影であつたを、身ほどのものが気付かなん

だ。なあ、布気田ふげた。よしよし、いや、村の衆しゆ。今度は鬼女、般若の面のかわりに、そのおかめの面を被せい、丑うしの刻ときまいり参まゐりの装束しょうぞくを剥はぎ、素裸すだかにして、踊おどらせろ。陰を陽に翻すのじや。

仕丁 あはだかおどの裸踊おど、有難い。よい慰み、よい慰み。よい慰み。よい慰み！

神職 退さがれ、棚村。慰みものではないぞ、神の御罰じや。

禰宜 踊りましようかな。ひひひ。(ニヤリニヤリと笑う。)

神職 何さ、笛、太鼓で囃はやしながら、両手を引張りひっぱり、ぐるぐる廻ましに、七度ななたびまで引廻まして突放せば、裸体らたいの婦おんなだ、仰向けに寝はせまい。目ともろともに、手も足も舞踊まいろう。

「遣やるべい、」 「遣やれ。」 「悪魔退散の御祈ごきとう禱。」 村人は饒舌しゃべり立つ。太鼓は座につき、早はやや笛ふえきこゆ。その二、三人はやにわにお沢さわの衣きぬに手を掛く。――

お沢 ああ、まあ、まあ。

神職 構ひきはわず引剥はげ。裸体はだかのおかめだ。紅あかい二布ふたの……湯具ゆぐは許せよ。

仕丁 腰卷こしまき、腰卷こしまき……(手伝いかかる。)

禰宜 おこしなどというのじや。……汚よじれておろうかの。

後見 この婦おんななら、きれいですがすべい。

お沢 (身悶えしながら) 堪忍して下さいまし、堪忍して下さいまし、そればかりは、そればかりは。

神職 罷成らん！ 当社とうやしろの掟おきてじゃ。が、さよういたした上は、追放おつばなして許して遣る。

お沢 どうぞ、このままお許し下さいまし、唯お目の前を離れましたら、里へも家へも帰らずに、あの谿河たにがわへ身を投げて、死しんでお詫わびをいたします。

神職 水は浅いわ。

お沢 いいえ、あの急な激しい流れ、巖いわに身体からだを砕いても。——ええ、情ない、口惜くちおしい。前刻さつきから幾度いくたびか、舌を噛かんで、舌を噛かんで死のうと思つても、三日、五日、一目も寝ぬせいか、一枚も欠けない歯が皆弛ゆるんで、噛切かみきるやくに立ちません。舌も縮くちびるんで唇を、唇を噛むばかり。(その唇より血を流す。)

神職 いやいよ悪鬼の形相ぎようそうじゃ。陽を以つて陰を払う。笛、太鼓、さあ、囃せ。引立てろ。踊らせい。

とりどりに、笛、太鼓の庭につきたるが、揃そろつて音ねを入れる。

お沢 (村人らに虐しいたげられつつ) 堪忍ね、堪忍、堪忍して、よう。堪忍……あれえ。

からりと鳴つて、響くと齊しく、金色の機はたの梭ひ、一具宙を飛落つ。一同吃きつ驚うす。社殿の片かた扉とびら、颯さつと開く。

巫女

(階きざしを馳はせ下る。髪は姥子おばこに、鼠小紋ねずみこもんの紋着もんつき、胸に手箱を掛けたり。馳いせ出で

つつ、その落ちたる梭を取つて押お戴いたき、社頭に恭礼し、けいひつを掛く) しい、：

…しい…しい…しい…

一同茫然とす。

御堂正面の扉、両方にさらさらと開く、赤く輝きたる光、燦然さんぜんとして漲る裡みなぎうちに、

秘密の境は一面の雪景せつけい。この時ちらちらと降りかかり、冬牡丹ふゆぼたん、寒菊かんぎく、白し

玉らたま、乙女おとめ椿つばきの咲満さきみてる上に、白雪しらゆきの橋、奥殿おくどのにかかりて玉虹ぎよつこうの如きを、

はらはらと渡り出づる、気高く、世にも美しき媛神ひめがみの姿見ゆ。

媛神 (白がさねして、薄紅梅うすこうばいに銀のさや形の衣がた、白地金欄しろじきんらんの帯もとどり、髻結まげがみいたる下髪さげがみ

の丈たけに余れるに、色紅くれなひにして、たとえば翡翠ひすいの羽はねにてはけるが如き一条ひとすじの征矢そやを、さ

し込みにて前簪まえかんざしにかざしたるが、瓔珞ようらくを取つて掛けし襷たすきを、片はずしにはずしな

がら、衝つと廻廊かいりやうの縁いに出づ。凜りんとして) お前たち、何をする。

—— (一同ものも言い得ず、ぬかずき伏す。少しおくれて、童男どうだんと童女どうじよと、ならび

に、目一つの怪しきが、唐輪と切禿きりかむろにて、前なるは錦の袋に鏡を捧げ、後なるは階あとを馳はせ下り、巫女の手より梭ひを取り受け、やがて、欄干らんかん擬宝珠ぎぼうしゆの左右に控う。媛神たてなほ立直りて——お沢さん、お沢さん。

巫女（取次ぐ）お女中じよちゆう、可恐おそろしい事はないぞな、はばかり多おほや、畏かしこけれど、お言葉ぞな、あれへの、おん前まえへの。

お沢 はい——はい……

媛神 まだ形代かたしろを確り持しつかつておいでだね。手がしびれよう。姥うば、預まかつてお上げ。（巫女受取うけとつて手箱てはこに差置さく）——お沢さん、あなたの頼たのみは分わりました。一念は届とけて上げます。名高い俳優やくしやだそうだけれど、私わたしは知りません、何処どこに、いま何なにをしていますか。巫女 今日きよう、今夜——唯今の事は、海山うみやま百里も離はなれまして、この姉あねさまも、知しりません。い。姥うばが申まを上げましょう。

媛神 聞ききましょう——お沢さん、その男おとこの生命いのちを取るのだね。

お沢 今さら、申まを上げますも、空そら恐おそろしうございます、空そら恐おそろしう存ぞんじあげます。

媛神 森もりの中でも、この場ばでも、私わたしに頼たのむのは同じ事こと。それとも思おもい留とまるのかい。

お沢 いいえ、私わたしの生命いのちをめされましても、一念いっぴんだけは、あの一念いっぴんだけは。——あんまり

男の薄情さ、大阪へも、追^{おい}縋^{すが}つて参りましたけれど、もう……男は、石とも、氷とも、その冷たさはありません。口も利^きかせはいたしません。

巫女 いやみ、つらみや、怨^{うら}み、腹立ち、怒^{おこ}つたりの、泣きついたり、口惜^{くや}しがったり、武^むしやぶりついたり、胸^{むなぐら}倉を取つたりの、それが何^{なん}になるものぞ。いい女が相^{そう}好^{こう}崩^ずして見つともない。何も言わずに、心に怨^{うら}んで、薄情ものに見せしめに、命^{いのち}の咒^{のろ}詛^いを、貴^{あなた}女^が様へ願^{がん}掛^がけさしやつた、姉^{あね}さんは、おお、お怜^{りこ}悧^うだの。いいお娘^こだ。いいお娘^こだ。さて何^{なん}とや、男の生命^{いのち}を取るのじやが、いまたちどころに殺^{ころ}すのか。手^てを萎^{なや}し、足を折^おり、あの、昔^{たの}田^{すけ}之助とかいうもののように胸^{どう}中^{なか}と顔ばかりにしたいのかの、それともその上、口も利^きかせず、死^しんだも同様^{どう}にという事^{こと}かいの。

お沢 ええ、もう一^{いっ}層^そ(屹^{ぎつ}と意^い氣^き組^くむ)ひと思いに！

巫女 お姫様、お聞きの通りでござります。

媛神 男は？

巫女 これを御覽遊ばされまし。(胸の手箱を高く捧げ、さし翳^{かぎ}して見せ参らす。)

媛神 花の都の花の舞台、咲いて乱れた花の中に、花の白拍子^{しらびょうし}を舞っている……

巫女 座頭^{ざがしら}俳優^{やくしや}が所作^{しよさく}事で、道成寺^{どうじやうじ}とか、……申すのでござります。

神職 ははつ、ははつ、恐れながら、御神おんかみに伺い奉る、伺い奉る……謹つつしみ謹もつみ白もす。

媛神 (——無言——)

神職 恐れながら伺い奉る……御神慮におかせられては——畏かしこくも、これにて漏れ承りま
する処におきましては——これなる悪女あくじよの不届ふとどきな願ねがの趣おもむき……趣をお聞き届け……

媛神 肯ききます。不届ふとどきとは思いません。

神職 や、この邪よこしまを、この汚けがれを、おとりいれにあい成りまするか。その御靈ごりよう、御魂みたま、御

神体は、いかなる、いずれより、天降あまくだらせます。……

媛神 石垣を堅めるために、人柱ひとばしらと成つて、活いきながら壁に塗られ、堤つつみを築くのに埋うず
められ、五穀のみのりのための犠牲いけにえとして、俎まないたに載せられた、私わたしたち、いろいろなお
友だちは、高い山、大な池おおき、遠い谷にもいくらもありません。——不断私わたしを何と言つてお

呼びになります。

神職 はつ、白寮はくりようごんげん権現、媛神ひめがみと申し上げ奉る。

媛神 その通り。

神職 そ、その媛神におかせられては、直すぐなること、正ただしきこと、明かに清らけきこと
をこそお司つかさどり遊ばさるれ、慥しかる、邪よこしまに汚れたる……

媛神 やみの夜は、月が邪だというのかい。村里に、形のありなしとも、悩み煩らいのあの時は、私を悪いと言うのかい。

神職 さ、さ、それゆえにこそ、祈り奉るものは、身を払い、心を払い、払い清めましての上に、正しき理、夜の道さえ明かなるよう、風も、病も、悪きをば払わせたまえと、御神の御前に祈り奉る。

媛神 それは御勝手、私も勝手、そんな事は知りません。

神職 これは、はや、恐れながら、御声、み言葉とも覚えませぬ。不肖、貞臣、徒らに身すぎ、口すぎ、世の活計に、神職は相勤めませぬ。刻苦勉励、学問をも任り、新しき神道を相学び、精進、齋、朝夕の供物に、魂の切火打って、御前にかしずき奉る……

媛神 私は些とも頼みはしません。こころざしは受けませんが、三宝にのつたものは、あとで、食べるのは、あなた方ではありませんか。

神職 えつ、えつ、それは決して正しき神のお言葉ではない。（わななきながら八方を礼拝す。禰宜、仕丁、同じく背ける方を礼拝す。）

媛神 邪な神のすることを御覧——いま目のあたりに、悪魔、鬼畜と罵らるる、恋の怨の

呪詛のろいの届しるく驗しを見せよう。(静しずに階きざを下はりてお沢いに居よ寄り) ずつとお立ち——私わたしの袖そでに

引添ひきうて、(巫女みこに) 姥うば、弓ゆみをお持ちか。

巫女 おお、これに。(梓あずさの弓ゆみを取り出す。)

媛神 (お沢に) その弓ゆみをお持ちなさい。(簪かんざしの箭やを取とつて授まけつつ) 楊よう 弓ゆみを射やるよ

うに——釘くぎを打うつて呪詛のろうのは、一念ひとの届つくのに、三月みつ、五月いつ、三年ねん、五年ご、日ひと月つきと曆こよみを待まちたねばなりません。いま、見るうちに男おとこの生命いのちを、いいかい、心をよく静しずめて。

——唐輪からわ。(女むすめの童わらわを呼よぶ) その鏡かがみを。(女むすめの童わらわは、錦にしんをひらく。手てにしつつ)——的まと、的まとです。あれを御覽ごらん。(空そらざまに取とつて照てらすや、森しん々しんたる森しんの梢こずえ一ひと 処ところに、

赤あかき光ひかり朦朧もうろうと浮うき出いづるとともに、テントツツン、テントツツン、下した方かたかすめて遥はるかにきこゆ)……見みえたか。

お沢 あれあれ、彼あそこ処こに——憎にくらしい。ああ、お姫ひめ様さま。

媛神 ちゃんとお狙ねらい。

お沢 畜ちく 生しょう！(切きつて放はなつ。)

一陣いちじんの迅はやき風かぜ、一同しどう聳もく 目めし、悚しょうりつ 立たつす。

巫女 お見事みごとや、お見事みごとやの。(しやがれた笑わらい) おほほほほ。(凄すげく笑わらう。)

吹つふきのる風の音凄すさまじく、荒波の響きを交う。舞台暗黒。少時しばらくして、光さす時、巫女。ハタと藁人形なげうを擲つ。その位置の真上より振袖落ち、紅くれないの裙すそ翻り、道成寺の白拍子の姿、一たび宙に流れ、きりきりと舞いつつ真まっさかさ倒たふさに落つ。もとより、仕掛けもの造りものの人形なるべし。神職、村人ら、立騒ぐ。

お沢 ああ、どうしましょう、あれ、（その胸、その手を捜ろうとして得ず、空しく搔かき捜ぐるのみ。）

媛神 それは幻、あなたの鏡に映るばかり、手に触さわるのではありません。

お沢 ああ唯貴女のお姿ばかり、暗い思おもは晴はれました。媛ひめ神様、お嬉うれしう存じます。

丁々坊 お使いのもの！（森の梢だいおんに大音あり）——お髪ぐしの御矢おんや、お返し申し上ぐる。∴唯今。——（梢より先ず呼びて、忽ち枝より飛び下くだる。形は山賤やまがつの木樵きこりにして、翼つばさあり、面おもては烏からす天狗てんぐなり。腰こしに一いち挺ちようの斧おのを帯おぶ）御矢をばそれへ。——（女の童わらわ階きざを下おり、既にもとにつつまたる、錦の袋の上に受く。）

媛神 御苦勞ね。

巫女 我折がれ、お早い事ごとでござりましたの。

丁々坊 またた 瞬またく間まというは、凡おほそこれでござるな。何が、芝居しばいは、大山おおやま一つ、柿かきの実みのつた
 ような見物みぶつでござる。此奴こやつ、（白拍子はくぱし）別嬪べつびんかと思えば、性しょうは毛けむくじやらの漢おのこが、
 白粉おしろいをつけて芻はねるであつた。

巫女 何を、何を言うぞいの。何なにごとや——山やまにはばかりおらんと世よの中なかを見みきつしやれ、
 人が笑わらいますに。何を言うぞいの。

丁々坊 何か知らぬが、それは措おけ。はて、何なんとやら、テンツルテンツルテンツルテンか、
 鋸のこぎりで樹きをひくより、早間はやまな腰こしを振ふり廻まわいて。やあ。（不器用ぶぎよう千万せんまんなる身みぶりにて不状ぶざうに
 踊おどりながら、白拍子はくぱしのむくろを引ひ跨またぎ、飛越ひねこえ、踊おどる）おもえばこの鐘かねうら
 めしやと、竜頭りゆうずに手てを掛かけ飛とぶぞと見えしが、引ひかつかいでぞ、ズーンジャンドンドン
 ジンジンジリリリズンズンズン（芻はねあ上ありつつ）ジャン（忽たちまち、ガーン、ど
 どと凄すさまじき音ねす。——神職かみつから腰こしをつく。丁々坊ちようちようぼう、落着おちき済すまして）という処ところじや。天井てんけい
 から、釣鐘つりがねが、ガーンと落ちて、パイと白拍子はくぱしが飛と込む拍子はくぱしに——御矢おんやが咽喉のどへ刺さつ
 た。（居いずまいを直ただす）——ははッ、姫君ひめぎみ。大釣鐘おほつりがねと白拍子はくぱしと、飛とぶ、落おつる、入いれちが
 いに、一矢ひとや、速すみに抜取ひりまして、虚空こくうを一飛ひとびに飛返とつてござる。が、ここは風かぜが吹ふき
 ぬけます。途みちすがら、遠州灘えんしゅうなだは、荒海あらかうみも、颯風はやても、大雨おおあめも、真まの暗夜やみよの大暴風雨おおあらし。

洗いも拭いもしませずに、血ぬられた御矢は浄まつてござる。そのままにお指料。
 また、天を飛びます、その御矢の光りをもって、沖に漂いました大船の難破一艘、乗組んだ二百あまりが、方角を認め、救われまして、南無大権現、媛神様と、船の上に黒く並んで、礼拝恭礼をしましてござる。——御利益、——御奇特、祝着に存じ奉る。

巫女 お喜びを申し上げます。

媛神 (梢を仰ぐ) ああ、空にきれいな太白星。あの光りにも恥かしい、……私の紅い簪なんぞ。……

神職 御神、かけまくもかしこき、あやしき御神、このまま生命を召さりようままよ、遊ばされました事すべて、正しき道でござりませうか——榛貞臣、平に、平に。……押して伺いたてまつる。

媛神 存じません。

禰宜 ええ、御神、御神。

媛神 知らない。

——「平に一同、」「一同偏に、」「押して伺い奉る、」村人らも異口同音にや

や迫りいう——

巫女 知らぬ、とおつしやる。

神職 いや、神々の道が知れませいで、世の中は東西南北を相失いまする。

媛神 廻つてお歩ある行きなさいまし、お沢さんをぐるぐると廻したように、ほほほ。そうし

て、道の返事は——ああ、あすこでしている。あれにお聞き。

「のりつけほうほう、ほうほう、」——梟ふくろう鳴く。

神職 何、あの梟ふくろう鳥をお返事とは？

媛神 あなた方がたの言う事は、私わたしには、時々あのように聞こえます。よくお聞きなさるがよ

い。

——梟しきり、頻しきりに鳴く。「のりつけほうほう」——

老仕丁 のりつけほうほう。のりたもうや、つげたもうや。あやしき神の御声おんこえじゃ、の

りつけほうほう。（と言うままに、真先まっさきに、梟のりうつに乗憑のりうつられて、目の色あやしく、身

ぶるいし、羽搏はばたきす。）

——これを見詰めて、禰宜と、仕丁と、もろともに、のり憑のりうつかれ、声を上ぐ。――

——「のりつけほう。——のりつけほうほう、ほう。」

次第に村人ら皆憑らる——「のりつけほうほう。ほうほう。ほうほう。ほうほう」——
 神職 言語道断、ただ事でない、一方ならぬ、夥多しい怪異じゃ。したたかな邪氣じ

や。何が、おのれ、何が、ほうほう……

（再び太刀を抜き、片手に幣を振り、飛より、煽りかかる人々を激しくなぎ払い打ち払う間、やがて惑乱し次第に昏迷して——ほうほう。——思わず袂をふるい、腰を刎ねて）ほう、ほう、のりつけ、のりつけほう。のりつけほう。「備考、この時、看客あるいは哄笑すべし。敢て煩わしとせず。」（慙くして、一人一人、枝々より鼻の呼び取る方に、ふわふわとおびき入れらる。）

丁々坊 ははははは。 （腹を抱えて笑う。）

媛神 姥、お客を帰そう。 あらしが来そうだから。

巫女 御意。

媛神 蘆毛、蘆毛。——（駒、おのずから、健かに、すとすと出づ。——ほうほうのりつけほうほう——と鳴きつつ来る。媛神。軽く手を拍つや、その鞍に積めるままなる燕、

太根、人参の類、おのずから解けてばらばらと左右に落つ。駒また高らかに鳴く。のりつけほうほう。——）

媛神 ほほほほ、(微笑みつつ)寄りて、蘆毛の鼻頭はなづらを軽く拵うつ。何だい、お前まで。

(駒、高嘶たかいななきす)「——この時、看客の笑しょうせい声あるいは静しまらん。然しからんには、

この戯曲なかば成功たるべし。」——お沢さん、疲れたろう。乗つておいで。姥うばは影に添つて、見送つてお上げ——人里まで。

お沢 お姫様。

巫女 もろともにお礼をば申上げます。

蘆毛は、ひとりして鱗爪ひづめ軽く、お沢に行く。

丁々坊 ははは、この梟、羽を生はやせ。(戯れながら)——熊手にかけて、白拍子の軀むくろ、藁人

形、そのほか、釘、獣皮などを搔かき浚さらう。)

巫女 さ、このお娘こ。——貴女様に、御挨拶申上げて……

お沢 (はつと手をつかう)お姫様。草刈くさかり、水汲みずくみいたします。お傍そばにいと存じます。

媛神 (廻廊に立つ)——私の傍わたしそばにおいでだと、一つ目のおばけに成ります、可こ恐わい、可

恐こい、……それに第一、こんな事、二度とはいけません。早く帰つて、そくさいにおくらし。——駒に乗るのに坐つていないで、遠慮のう。

お沢 (涙ぐみつつ)お姫様。

巫女 丁どや——丑の上刻ぞの。(手綱を取る。)

媛神 (鬢に真白き手を、矢を黒髪に、女性性の最も優しく、なよやかなる容儀見ゆ。

梭を持てるが背後に引添い、前なる女の童は、錦の袋を取出で下より翳し向く。媛神、

半ば簪して、その鏡を視る。丁々坊は熊手をあつかい、巫女は手綱を捌きつつ——大

空に、笙、箏、篳篥、幽なる楽。奥殿に再び雪ふる。まきおろして) ——

——幕——

青空文庫情報

底本：「海神別荘 他二篇」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年4月18日第1刷発行

2001（平成13）年1月15日第4刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六巻」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1927（昭和2）年3月

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

多神教

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>